



無限の創造性を

専務取締役
企画本部長 永井邦夫

日本人は模倣に強いが創造性に欠けると謂われる。果してそうなのか。明治以来西欧諸強に伍して負けまいとして、そして太平洋戦争敗北後は国際貿易の中での競争力を早く身につけるために、かく相成ったのか。どっちだろうか。いずれにせよ日本人は日本人なりの頭脳と知恵を有って居ると信じるので、それ程卑下しなくともよいと思う。殊に之からの低速経済の中ではジックリと時間をかけてよいものを創りあげて行くことが大事である。お御興をかつぐ派手さより孤独に打克つ合理性を追求する時代が到来して居る。急がば廻れである。量よりも質の時代に、生きて行く為には Slow but Steady で行こうではないか。

化学工業の置かれて居る環境はまことに厳しく、装置産業のメリットを享受する時代は終わったとは云わぬものの、之からは巨大投資によるスケールメリットを追うよりは価値の高い精密化学に重点志向することが要請されよう。と云うことは研究開発に益々力を傾けることが要請される。換言すれば研究開発に今迄以上の投資を覚悟することである。不況だからと言って精神的にケチケチムードに陥ってはいけない。若し投資の早期回収が必ず期待出来るものみに眼を向けて居たら恐らく望ましい成果は挙がらないだろう。せっかちな国民性から低成長下では投資効果の速かでないものには支出してはならない等と言うことになったら日本は何処迄沈没してろうか考えるだけでも怖い。真面目な研究と開発にはそれだけの裏付けが必要であり、その中からまっとうに役立つ成果が出て来る。努力のない処に成果はなく、裏付けなき処に創造は生れない。創造性を期待するからにはこの点を見誤ってはなるまい。

ローマクラブの「人類の危機」レポートは成長の限界について今から5年前に偉大な警告を与えて呉れた。そしてオイルショックに遭遇した我々は有限な資源を如何に有利に利用すべきかを教えられた。経済的には不況と表現される昨今の世界環境であるが、もはや今迄と同じサイクルを考へてはならない。新しい時代に入った我々には研究と開発とに依って自分達の進路を開いて行くより生存の道はない。然も世界的視野を持ちつつ。

『人類がもし新しい針路に向って踏み出すとすれば、前例のないほどの規模と範囲での一致した国際的な行動と共同の長期計画が必要となるであろう。』

(ローマクラブの見解——「成長の限界」より)